

# 第1編

## ながくて幸せのモノサシづくり 事業報告書



## はじめに

### 1 背景と目的

これまでの右肩上がりの経済成長を追及してきた社会とは異なる、心の豊かさや幸せ感を実現していく社会の発展がより求められる時代になりました。

そこで、本市では、3つのフラッグ「つながり」、「あんしん」、「みどり」を基本的な理念として掲げ、「日本一の福祉のまち＝一人ひとりの幸福度の高いまち」を目指して、だれもが地域で役割や居場所がある「たつせがある」まちづくりを進めています。

目指すまちの実現のためには、市民自らが地域のことを考え、地域の困りごととは自分たちで解決していかなければなりません。そのためには、①市民生活や地域社会の状況はどうなのか、②まちづくりは目指す方向に向かって着実に進んでいるのか、について、市民とともに確認していくための道具としてのモノサシが必要ではないかと考え、市民目線による「ながくて幸せのモノサシづくり」に取り組みました。

### 2 事業を始めるにあたって

本市が目指す将来像の実現に向けては、市民一人ひとりの主体的な活動が鍵となることから、「幸せのモノサシ」をつくる一連の取組過程そのものが、市民自らが動き始めるための「人づくり」であり、「仕組みづくり」であると位置づけました。

そして、その取組に必要なプロセスを、次のとおり整理しました。

#### 「幸せのモノサシ」をつくるための4つのプロセス

**プロセス1 地域独自、長久手独自のよりよい将来像を持つこと**

**プロセス2 地域のことや暮らしをよく知り、把握すること**

**プロセス3 地域の暮らしとそのビジョン、将来像が結びつく指標を見つけること**

**プロセス4 地域の暮らしの質を高める工夫を考えて、実際に行動すること**

また、本事業に、市民の主体的な活動を支える職員（若手）が市民と同じ立場で事業に参加しました。市民との関わりを通して、職員がこれからの市民協働のあり方や仕事の進め方を見直す機会としました。

### 3 事業の進め方

本事業は、図1の第1～3ステップで進めました。

前述の4つのプロセスに沿って説明すると、まず、プロセス1として、2050年に向けた「長久手未来まちづくりビジョン」（平成27年度策定）をもとに、まちの将来像を具体的にイメージしました。

プロセス2として、現状把握のためのアンケート調査項目の設定、調査結果の分析を行いました。

そして、プロセス3として「幸せのモノサシづくり」、それと並行しプロセス4として幸せ実感を高める市民主体の活動の実践を始めました。

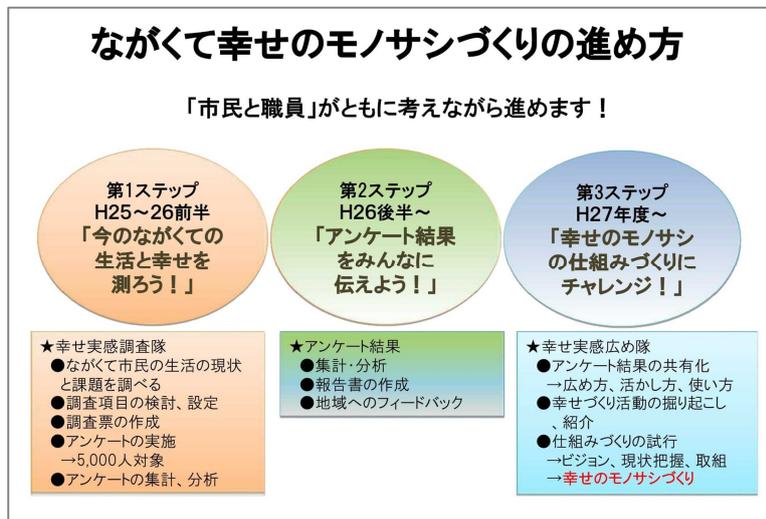


図1 ながくて幸せのモノサシづくりの進め方

### 4 本書について

本書の第1編では、取組が始まった平成25年度から「ながくて幸せのモノサシ」が完成した平成29年度までの事業概要及び取組内容、特に本事業の軸となった市民協働の取組内容をまとめています。

そして、市民協働によって導き出された「ながくて幸せのモノサシ」の内容をまとめています。

第2編では、平成28年度に実施した第2回目の幸せ実感調査アンケート結果についてまとめています。

# 第1章 事業概要及び取組内容

## 1 事業期間及び参加者等

### (1) 事業期間

平成25年8月から平成29年3月まで

### (2) 参加者

事業全体の中で、いずれかの段階で関わった参加者数は次のとおりです。

ア 公募市民 30人（登録人数）

広報、HP等により参加者を公募。

イ 市職員 18人（登録人数）

概ね20代から30代の若手職員を庁内公募。

### (3) アドバイザー

草郷 孝好（関西大学 社会学部教授）

「ながくて幸せのモノサシづくり」を市民と職員とで進めていくに当たり、専門的な立場から事業全般に対する助言又は提言していただくため、本事業に関するアドバイザー制度を導入し、草郷氏に委嘱しました。

## 2 取組経過及び内容

### (1) 初動（平成25年度）

本事業の立ち上げにあたって、方針や進め方について整理するとともに、市民協働の取組に向けて、市民及び職員の事業に対する理解や共感を促すための講演会及び勉強会を行いました。

ア 地域づくり講演会「ながくての幸せのモノサシ～みんなでつくる、みんなの幸せ～」

日時：平成25年8月28日（月）午後2時～午後4時30分

場所：福祉の家 集会室

参加者：70人

内容：幸せをキーワードにしたブータンの取組や国内の様々な事例紹介、「長久手」の幸せについての講演及びワークショップ

講師：関西大学 社会学部教授 草郷 孝好

イ 職員勉強会

日時：平成25年10月28日（月）午後2時～午後4時30分

場所：西庁舎3階研修室

対象：各課等の職員 50～60人

内容：本市の目指す姿と幸せのモノサシづくり事業との関係性についての説明及び長久手の望ましい姿や幸せを構成する領域についてのワークショップ

講師：関西大学 社会学部教授 草郷 孝好

(2) 幸せのモノサシづくりに向けた取組（平成25年度～平成28年度）

ア ながくて幸せ実感アンケート調査（基礎調査）の実施

「今のながくての生活と幸せを測ろう！」をテーマに、市民の生活の現状と課題等について把握するため、平成25年度及び平成28年度に、18歳以上の市民5,000人にアンケート調査を実施しました。

調査票の設計にあたっては、公募市民と市職員で「ながくて幸せ実感調査隊」を結成し、20問の項目で構成する調査票を作成しました。

イ 調査結果の分析、活用方法の検討

調査結果は、幸せ感、住み心地、生活実感と年齢や居住地等の個人の属性との相関分析も行い、市民の幸せや住みよさの向上のために、今後伸ばしていくべき点、改善するべき点や、地域ごとの特徴を確認し、報告書にまとめました。また、「ながくて幸せ実感調査隊」でも、調査結果を共有・分析するとともに、調査の活用方法やまちづくり活動のアイデア出しを行いました。

ウ 調査結果の活用及び市民主体の活動への展開

調査結果を周知し、市民による活用を促すとともに、市民主体で幸せ実感を高める活動を実践するため、「ながくて幸せ実感調査隊」から「ながくて幸せ実感広め隊」へ活動を展開しました。

具体的には、幸せにつながる活動をしている市民や市民団体を掘り起こし、紹介することで、本事業への参加と理解を促すとともに、地域の人と人とのつながりや、市民の地域活動への参加を促すことを目指して活動を行いました。

### 3 市民協働の取組

本事業では、公募市民と職員で構成するグループを結成し、その活動を中心に進めてきました。

(1) ながくて幸せ実感調査隊（平成25年度～平成26年度）

ながくて幸せ実感調査隊は、市民生活の当事者である市民が、まちの望ましい姿を描き、幸せにつながる要素を検討し、調査票の質問項目を作成しました。その過程では、ながくて市民まつりに出展し、来場者インタビューをするなど、幸せの要素について参考となる情報を集めました。

## ながくて幸せ実感調査隊開催経過及び内容

回	日時	内容
第1回	平成25年 10月28日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・将来の望ましい長久手の姿の検討</li> <li>・今後の活動内容の検討</li> </ul>
市民まつり	11月10日	インタビューテーマ： <ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたの幸福度は何点？その理由は？</li> <li>・長久手市の幸福度は何点？その理由は？</li> </ul>
第2回	11月25日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長久手の幸せのモノサシづくりとは</li> <li>・幸せ実感調査隊の進め方の検討</li> <li>・市民インタビュー結果報告</li> <li>・幸せ実感アンケートづくり</li> </ul>
第3回	12月9日	幸せ実感調査アンケートづくり
第4回	12月20日	幸せ実感調査の質問項目の検討
第5回	平成26年 1月29日	幸せ実感調査における調査票案の確認
第6回	2月6日	幸せ実感調査における調査票案の確認
第7回	2月12日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケート調査票の完成</li> <li>・市長への報告</li> </ul>
第8回	5月9日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケート集計結果から読み取れること</li> <li>・さらに分析したいこと</li> </ul>
第9回	7月4日	・アンケート結果の共有、分析、広め方の検討
第10回	8月22日	・アンケート結果の今後の活用方法、広め方の検討



ミーティングの様子1



ミーティングの様子2

(2) ながくて幸せ実感広め隊（平成27年度～平成28年度）

平成27年度は、広め隊が数人のグループ単位で、幸せにつながる活動に取り組む市民や市民団体を「幸せマイスター」として取材しました。平成28年3月には、まとめとして「幸せ実感フェスティバル」を開催し、それらの活動を紹介するとともに、活動の周知を図りました。なお、同フェスティバルは、広め隊が企画・運営を担いました。

ながくて幸せ実感広め隊（平成27年度）開催記録及び内容

回	日時	内容
第1回	平成27年 6月19日	・ガイダンス ・アンケート結果から読み取れることの共有
第2回	7月24日	広め隊の活動内容の検討
第3回	8月12日	・幸せ感をアップする分野の検討
第4回	9月15日	取材対象者の検討、取材の段取り確認
第5回	10月28日	・取材チームの成果発表及び意見交換 ・市民まつりのアイデア出し
市民まつり	11月8日	インタビューテーマ： 最近あった幸せなことは何ですか？
第6回	11月25日	・市民まつりの振り返り ・取材フォーマットの検討
第7回	12月21日	取材経過報告
第8回	平成28年 1月26日	・チームの取材報告 ・フォーラムの検討 ・今後の活動についての意見交換
第9回	2月23日	・チームの取材報告 ・幸せ実感フェスティバルの検討 ・今後の活動についての意見交換
幸せ実感フェスティバル検討会	2月9日 3月3日	幸せ実感フェスティバルに向けた内容の企画、運営体制等の検討
幸せ実感フェスティバル	3月26日	場所：市役所西庁舎3階研修室 参加者：83人 テーマ：あったかい幸せのカケラあなたにもおすそ分け！ 内容：・幸せのモノサシづくりと広め隊活動の周知 ・幸せマイスターの活動紹介



ミーティングの様子



幸せ実感フェスティバルの様子



## 長久手市棒の手保存会

取材  
報告

長久手市棒の手保存会  
副会長浅井智志氏の協力により  
著作寺山 量蔵院にて

**B** チーム ▶ テーマ: 交流・子供

私たち B チームは交流・子供のテーマをもとに、長久手市棒の手保存会さんが町の人々などのように関わること、どんな幸せを感じ、何を伝えて活動してみえるのか、副会長浅井智志さんの協力によりメンバーの皆さんとお話を伺いました！





**棒の手ってなに？**

棒の手は愛知県の代表的な民俗芸能

「長久手の棒の手」は昭和31年6月1日に国の無形民俗文化財に指定されています。

**棒の手の起源は？**

棒の手の起源ははっきりした資料がなく定説がない。一説には本郷城主(現在の日進市内)丹羽若狭守氏清が、城下の農民に武術を習得させたのが始まりで、丹羽氏の勢力が拡大するのに従い各地に広まったとする説や、穀物をはじめ棒の手の内容に関する記録には修験道などの影響が強いところから、修験道に起源を求めた説もある。

**棒の手の歴史は？**

五穀豊熟を祈り、作物の収穫に感謝するお祭りとして、1523年に初めて日進市のオマント誓固祭の時、棒の手も白山宮に奉納した。1653年辺りから、旗本の神社にそれぞれの地区の棒の手奉納を行うようになった。1830年代には、各地域で誓固祭が盛んになった。

取材報告

～ 皆の幸せを自分の幸せに。自分の幸せを皆の幸せに。～

あそびすと 古賀めぐみさん



学生時代から児童会・生徒会・大学祭実行委員などたくさん活動されてきた古賀さん。現在は、4人のお子さんを持つお母さんです。いつも笑顔な古賀さんに「幸せのヒント」を教えていただきました。

【テーマ・キーワード】  
子ども・つながり・交流



団体名	あそびすと	設立	2年前
問合せ先	古賀めぐみさん	会員数	11名
主な活動場所	長久手市内		
主な活動内容	子ども達が主体的にボランティア活動を行う。		
その他(備考)	企画から参加するプロジェクト委員、イベント情報が届くメール委員どちらも募集中。		
ホームページ	-	連絡先	090-9338-0654

■子ども地域の一員！

あそびすとを始めたきっかけは？  
引越した先に子ども会がなかったのが一番のきっかけです。子ども会は、こどもも、忙しい、入る人が少ないため減少の傾向にあります。ないなら作ってしまおう。それも、お母さんが主体で子どもがお客さんの子ども会ではなく、子ども地域の一員である子どもたち自身わかるような、こども自身が考えて、作っていく集まりを作ろう！



幸せマイスターの取材記録 (一部抜粋)

平成28年度は、最終的にとりまとめる「ながくて幸せのモノサシ」のイメージを描きながら、活動を進めました。

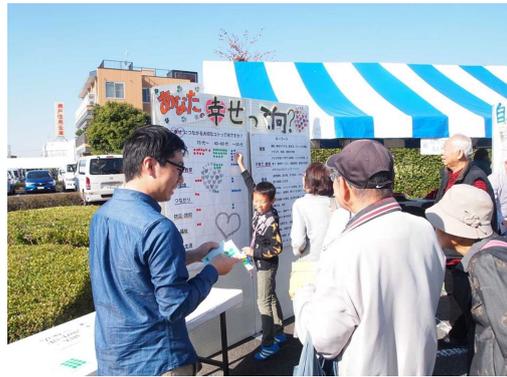
平成27年度に行った「幸せマイスター」の取材活動を、継続的な活動にしていくために、より身近な活動にもスポットを当てることとし、取材対象者を「幸せマイスター」から長久手未来まちづくりビジョン（後述）に合わせた「長久手人（ながくてびと）」とし、取材活動を行いました。活動の中で市民と交流することを通して、幸せのモノサシのヒントを集めていきました。

### ながくて幸せ実感広め隊（平成28年度）開催記録及び内容

回	日時	内容
第1回	平成28年 4月25日	・ 幸せ実感フェスティバル振り返り ・ 平成28年度の幸せ実感広め隊の活動内容の検討
第2回	5月16日	「幸せマイスター発掘・紹介」活動の目標、スケジュールの検討
第3回	6月20日	「幸せマイスター発掘・紹介」活動の仕組みの検討
第4回	7月16日	取材対象者の情報の共有
第5回	8月29日	・ お試し取材、質問の検討 ・ 幸せアンケートの調査項目の検討
第6回	9月12日	・ 幸せ実感アンケートの頭紙の検討 ・ 取材の際に活用する「広め隊」紹介シートの検討
第7回	10月5日	幸せのモノサシのイメージの共有
第8回	11月2日	・ 幸せのモノサシのイメージの具体化 ・ 市民まつりブース出店内容検討
市民まつり	11月13日	インタビューテーマ： “幸せ”につながる大切なコトって何ですか？
第9回	12月12日	・ 市民まつりの振り返り ・ モノサシづくりに向けたスケジュールの確認
第10回	平成29年 1月23日	・ 幸せのモノサシ案の検討 ・ 幸せのモノサシのイメージ検討
第11回	3月1日	・ アンケート結果速報の確認 ・ 幸せのモノサシの検討
第12回	3月27日	幸せのモノサシの確認



ミーティングの様子



市民まつりでのインタビューの様子

取材日：平成 28 年 12 月 16 日

## 長久手人 File No 1

長久手人の氏名  
西尾 寿江

活動内容 長久手市劇団 座☆NAGAKUTEの劇団員として演技を披露し、奮闘中！

**Q1** 活動内容と始めたきっかけは？

平成24年に入団、3年目になります。高校時代に演劇部に所属していましたが、それ以降はお芝居ができる環境に恵まれませんでした。けれど、心の中にずっとやりたい気持ちは残っていました。地元に戻ってきたとき、またま団員募集の要項をみかけ、応募しました。稽古を見学した時、70歳の方も頑張っている姿に感動し、自分にもまだできるのではないかと奮い立ち、参加しようと思いました。長年の夢が、叶いました。

**Q2** 「この活動の「ここ」がおもしろい！ やりがいがある！と思う事は？

演出家の先生の話の聞いた時、先輩方の積み重ねられてきた演技を見たりできることに感動し、ため息をつくこともしばしば…。しかし、役者をやりながら苦しみもあり、楽しみもありの繰り返しの中で、出来上がっていく自分そのものに充実感があります。今は「長久手人物語」の劇のなかでとてもいい役をさせていただくことに、感謝しています。次の公演に向けて家の中でも猛練習中、役者としてやりとげられるのも、一緒に暮らしている家族の協力があってこそできること、ありがたいです。

**Q3** ずばり！あなたが考える「幸せ」とは？

家族が安定しているのも、孫と遊んだり、仕事もやり、趣味のお芝居もすることができ、とても充実していることに幸せを感じています。家族がいるから、頑張れる。そんな今が一番幸せです。

**Q4** フリーメッセージ  
(例)将来の目標、参加の呼びかけ

孫の将来のためにも、もともと住みよい長久手市になってほしいです。具体的には、自分の住んでいる地区には公園が少ないので、まず公園をもっとほしいです。自分としては長生きができ、座をずっと続けられるしたいと思います。

劇団の稽古の様子。本番直前、気が合いが伝わります

市民劇「長久手人物語」では、市役所職員を熱演！

**取材者( たらし&ともこさん )のコメント**  
とてもお孫さんがいるとは思えない程、きれいな方でした。その姿には家族への思いや、充実した環境が映し出されているのだなと感じました。趣味のお芝居も、一人でやることはできませんよね。なので、色々な人と関わり合いながら送る生活が充実感を生み出すのかなと思います。これからは素敵な市になるよう役者として奮闘してまいります。

取材日：平成 28 年 12 月 19 日

## 長久手人 File No 2

長久手人の氏名  
NPO法人 長久手楽業ファーマーズ

活動内容 「農業を楽しむ」ことをベースに、安心安全な野菜作りと市民を巻き込んだ食育活動。またその活動を通じて地域の交流の場作り。

**Q1** 活動内容と始めたきっかけは？

立上げのきっかけは、平成18年の農業校卒業生。現在の活動者は12〜13人。野菜作りを通して健康になりたい、自分の時間を充実させたい、安心・安全な野菜を子どもに食べさせたいなど、それぞれの活動のきっかけは異なるものの、みんなの共通点は「農業に興味がある！」こと。

**Q2** 「この活動の「ここ」がおもしろい！ やりがいがある！と思う事は？

春はジャガイモ、秋はさつまいもの収穫体験を親子を中心(約60組)に実施！参加者と一緒作物を育てる楽しさと収穫の喜びを共有できることが何よりやりがい。  
また、無農薬で作っているため、気候や虫など様々な問題が発生するが、それを乗り越えて収穫できる喜びや成長もやりがい。そして、おいしく食べる！ことも次に繋がるやりがい。

**Q3** ずばり！あなたが考える「幸せ」とは？

この活動を通して、なんでも言い合える仲間ができたこと。健康でこの活動ができること。にかく外に出て協働、みんなで仕事をする。孤独じゃないこと。そんなことが「幸せ」かな。  
でも、意外と幸せについて考えないことが「幸せ」なかも。

**Q4** フリーメッセージ  
(例)将来の目標、参加の呼びかけ

ぜひ、若い人にも入ってもらいたい！農業校卒業生歓迎！  
年齢を重ね、健康を考えると「しんどい」時が増えました。でも、子どもたちに安心安全な野菜を届けたい。元気な作物を育てたい、自分の新しい発見を糧に情熱を持って楽しんでやろう！と思っています。

取材者( かずちゃん、ユッキー )のコメント

活動の始まりは、まず「土を作る」からだっただろう。いきなり野菜を作ろうと思っても作ることはできなかった。これは人と人との関係も一緒。すぐに関係を深められる訳ではなく、少しずつ同じ目標に向かい、活動していくことでつながっていくのだと感じました。また、やるやっ頂いたとても目覚ましい嬉しさも、なによりも長久手楽業ファーマーズの皆さんとの活動と関係性を物語っていました。

長久手人の取材記録（一部）

## 第2章 幸せのモノサシ

### 1 幸せのモノサシとは

幸せのモノサシは、まちが掲げる目指す姿に向けて、①市民生活や地域社会の状況はどうか、②まちづくりは目指す方向に向かって着実に進んでいるのか、について確かめる「尺度＝道具」として、図2のと通りのイメージとしました。

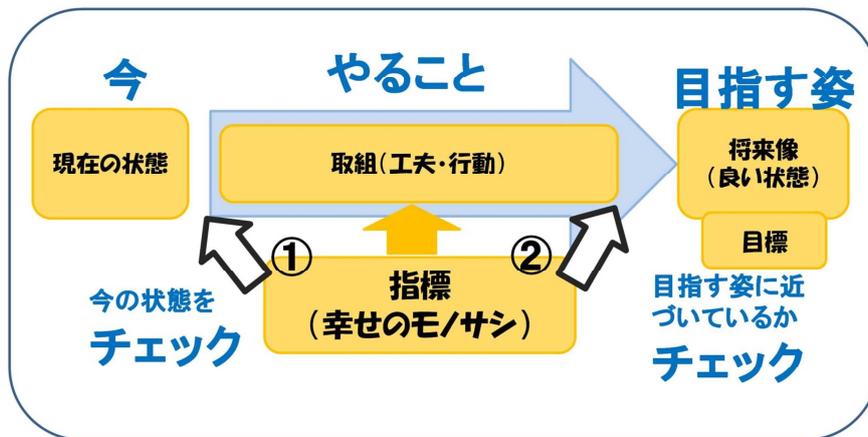


図2 ながくて幸せのモノサシのイメージ

ここで、まちや地域の状態を測るモノサシを具体的にイメージできるよう、市民参加で持続するまちにするためのコミュニティ指標をつくり、この指標に基いた様々な取組が行われている米国のシアトルの例を参考に、独自に設定した具体例を紹介します。

#### ■ シアトルの「現在」は・・・？

- ・サケが川に戻らない
- ・都市部の犯罪が多発し、相次いで郊外への引っ越しが起こる
- ・自動車移動が中心で公共交通が衰退し、排気ガスによる大気汚染が発生している

そこで、将来像と目標を次のとおり掲げました。

- まちの将来象「将来世代もよい暮らしを継続できるまち」
- 目標「多数のサケがふたたび遡上できるシアトルのまちづくり」

ここで特徴的なのは、人ではなく「サケ」で目標設定した点です。

- **どのようなまちの状態が望ましいのか？～目指すまちの姿を具体化する**
  - ・サケが戻るきれいな川にする
  - ・人や住宅、企業、学校が拡散しない
  - ・環境に配慮した生活をする

(都市部が衰退し、乱開発が進んで、サケの生態に悪影響を及ぼすことがないよう、郊外の環境を良好な状態に保つことが望ましい。)

- **今後の工夫、取組、対策～市民に何ができるか、何をすべきかを見つける**
  - ・洗剤を見直して環境に優しい素材を使う
  - ・できるだけ公共交通や自転車を利用する
  - ・郊外開発を抑制し、都市部の緑化を進める

- **工夫、取組、対策の進捗の状況を確認するための諸指標**
  - ・サケの回帰率、河川の濁り度合い
  - ・有害物質の流出、エネルギー使用量
  - ・自動車または公共交通による移動割合
  - ・コミュニティ活動への参画

ひとつひとつをバラバラにみただけでは、サケの遡上にどうつながるのかピンとこないかもしれません。サケが遡上する川は、汚れのない川であることが必要です。そのようなサケが遡上できる川にするためには、生活の場面場面で、住民がどのような暮らし方をするかにかかっています。これらの指標によって、一人ひとりの行動に加えて、地域住民が一体となってご近所や地域の子どもたちに教えたり、働きかけたりすることで、普段から環境を大切にする生活に変えていくことを促します。そのためには、きれいな川とたくさんのサケの遡上するまちの実現を、コミュニティで共有できているかが重要です。

この仕組みを図にしたものが図3になります。



図3 米国シアトルのコミュニティ指標例

## 2 ながくて幸せのモノサシの構造と内容

シアトルのコミュニティ指標を参考にして、幸せ実感広め隊は、①本市がどのようなまちを目指すのかを設定し、②そのまちを実現した場合の人やまちの状態を描き出し、③描写された人やまちの状態を左右する要因となる行動や環境等のデータを選択・整理しました。

そして、それらを活用することで、まちづくりの進展状況を総合的に確認できると考えました。そこで、ながくての幸せのモノサシは、図4の構造としました。

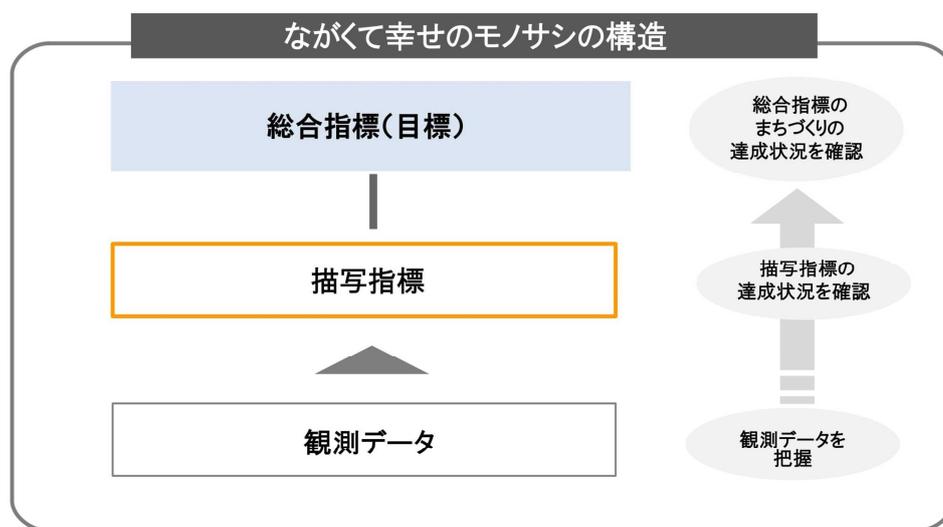


図4 ながくて幸せのモノサシの構造 (仕組み)

### ①総合指標 (目標)

市が目指すまちの姿をわかりやすく表現した概念指標であり目標

### ②描写指標

総合指標で表現するまちや人の状態を具体的に表現した指標

### ③観測データ

描写指標を左右する要因となるまちの人の具体的な行動、環境等のデータ

ながくて幸せ実感広め隊では、「長久手未来まちづくりビジョン」をまちの将来像として描きつつ、2回の幸せ実感アンケート調査結果及びこれまでの活動を踏まえて、前述の構造に沿って「ながくて幸せのモノサシ」を検討し、とりまとめました。

■将来像 ながくて未来まちづくりビジョン全体テーマ

**人・場・時をつなぎ 夢をはぐくむ長久手**

ながくてびと  
**長久手人こそ私たちの誇り 気長に手をかけ みんなで未来を拓く**

市は、平成28年3月に、2050年の長期を見据えた「長久手市未来まちづくりビジョン」を策定しました。

このビジョンの中で、長久手市に関わりがある一人ひとりを「長久手人（ながくてびと）」と名付けています。

このビジョンを実現するためには、どんなまちや人の状態であつたらいいのかを具体的にイメージし、どういったモノサシ（視点、切り口）で、ビジョンの実現具合や取組成果を確認していくかを考えました。



出典：長久手未来まちづくりビジョン

## ■幸せのモノサシ

### 総合指標（目標）

#### 地域で子どもの笑顔を育てるまち

##### 【総合指標（目標）の検討にあたって】

地域の大人がボランティア活動を通して、子どもたちとふれあう際に、大人がいきいきしていると、子どもも自然といきいきとする姿を見て、「大人のふるまいが子どもに影響する」ことを実感したという幸せ実感広め隊メンバーの話がありました。

子どもの子どもの世代まで、この豊かなまちを引き継いでいくためには、地域が一体となって、環境保全、伝統文化の継承、生きがいつくり、つながりづくり、子どもや高齢者の見守りなど、多面的なまちづくり活動を行わなければいけません。

活動を担う大人が、まち（地域）や人とつながり、まちの中で笑顔で活躍することで、子どもの笑顔を育てます。子どもの笑顔（＝幸せ）が、大人の笑顔につながり、ひいては、まちの幸せにつながると考え、この指標（目標）が生まれました。

そして、総合指標を補完する指標として、日頃からあいさつをしたり、ご近所同士で支え合えあったりするなど、人やまち（地域）がつながるまちづくりを軸とした描写指標を設定することとしました。

#### 幸せな長久手につながる人とまちの描写指標

1. 日頃から笑顔で生活ができていると感じている
2. 大人も子どもも、地域の行事や活動に参加している
3. 安心して自宅にすることができる
4. 日頃から近所の人にあいさつをする、される習慣がある
5. 自分がこのまちの一員である（役割がある）と感じられる
6. 地域に愛着がある
7. 近所で声をかけ合って、頼り、頼られる関係がある
8. 子どもたちの成長を身近に感じることができる

### 【描写指標の検討にあたって】

総合指標を実現する大切な要素である「地域のつながり」を軸とし、まちと人の状態の具体的なイメージを指標として設定しました。設定にあたっては、「される（受動）」だけでなく、「する（能動）」視点も加えています。

### 観測データ

#### ながくて幸せ実感アンケート項目より ※（ ）内は、関連する描写指標

- 1 日頃から笑顔で心豊かな生活ができていますか。（1）
- 2 体を動かしたり運動したりと健康的な暮らしができていますか。（1）
- 3 お住まいの地域では、地域で困った人への助け合いはできていますか。（3、4、5、6、7、8）
- 4 日常的にあいさつをしていますか。（4、5、7）
- 5 日常的に近所づきあいをしていますか。（4、5、7）
- 6 お住まいの地域であなたは「たつせ」がありますか。（2、4、5、6、7）
- 7 お住まいの地域には、自慢したい地域の「宝」がありますか。（6）
- 8 お住まいの地域の子どもたちは、のびのびと育っていると思いますか。（2、4、8）
- 9 お住まいの地域の子どもとあなたとのコミュニケーションは十分取れていると思いますか。（2、4、8）
- 10 お住まいの地域には、公園や屋外の遊び場がありますか。（8）
- 11 あなたは、日ごろ地域社会の一員として、何か社会のために役立ちたいと思っていますか。それとも、あまりそのようなことは考えていませんか。（5、6）
- 12 お住まいの地域は、治安がよく、安心して暮らせますか。（3）

### 【観測データの検討にあたって】

前述の8つの描写指標に挙げる状態を左右する要因となり、今後観測が必要である人の行動や環境を幸せ実感アンケートの設問から選定しました。選定にあたっては、それらの設問と個人の幸せ感との相関関係（表 2-1-1、63 ページ）も参考にしています。

なお、これら観測データは、総合計画策定や見直しの際に実施する予定の「市民意識調査」（5年に1回の予定）により把握します。

### 3 ながくて幸せのモノサシの活用方法

#### (1) 市民による活用

ながくて幸せのモノサシは、市民と職員の協働を積み重ね、導き出されたものであり、市民が積極的に活用していくものです。

まちの現状を把握するだけでなく、現状とビジョンとのギャップを埋めるための活動、例えば、市民が活動や取組を新たに見つけたり、既存の活動の中から、支援・応援したりする活動を選び出したりすることに活用できます。また、その活動等が目指すべきまちの姿に近づいていっているのか、成果も確認できます。

このように、ながくて幸せのモノサシは、まちづくりの原動力となる市民の主体的な活動を活発にしていくために重要な役割を果たします（図5）。

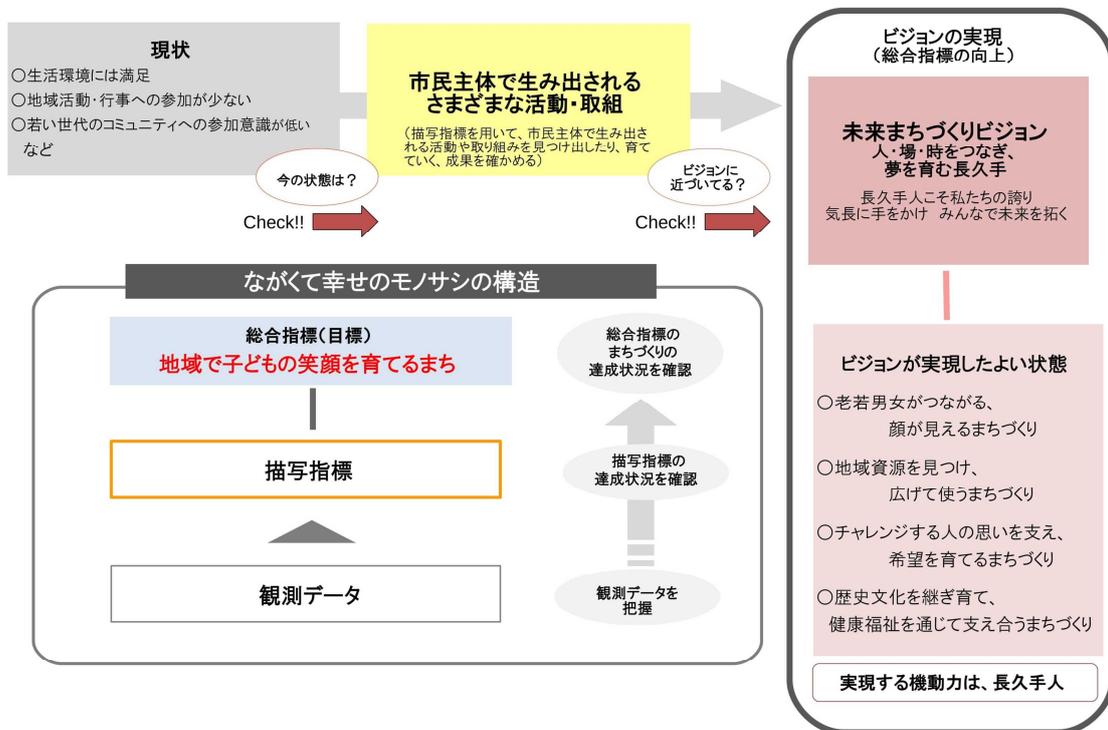


図5 市民主体のまちづくりにおけるながくて幸せのモノサシの役割

#### (2) 行政による活用

幸せのモノサシは、市民が積極的に活用するものとはいえ、行政が、市民の幸せ感に基づくまちづくりを進めていくためにも重要な役割を果たします。

従来、市民意識調査や、総合計画に基づく施策事業の取組に関係して収集されている様々なデータなどの指標により、まちづくりの進展の評価及び施策立案を行ってきました。

今後は、それらのデータと幸せのモノサシを組み合わせ活用していくことで、市民の生活実感に即したまちづくりを進めていくことができます。

本市は、平均年齢38.6才（平成27年度国勢調査）で、子どもが多く若いまちです。しかし、これからの少子高齢化・人口減少時代に向けて、安心して子どもを生み、育てられるまちづくり、また、子どもがずっと住み続けたいと思えるまちづくりを進めるには、「子育て・教育」「地域のつながり」は、大きな柱として本市が注力していくべき分野であると考えられます。

このたび、目指すまちの実現に向けた指標であり目標である「地域で子どもの笑顔を育てるまち」は、市民生活の当事者である市民の実感から生み出され、そこから「子どもを中心とした地域の関係づくり」の必要性も確認できました。

平成29年度から本格的に始まる次期総合計画策定の取組過程において、幸せのモノサシを多くの人と共有し、図6にあるように、「地域で子どもの笑顔を育てる」ために、市民と行政がともに取り組むための施策について具体的に検討していきます。

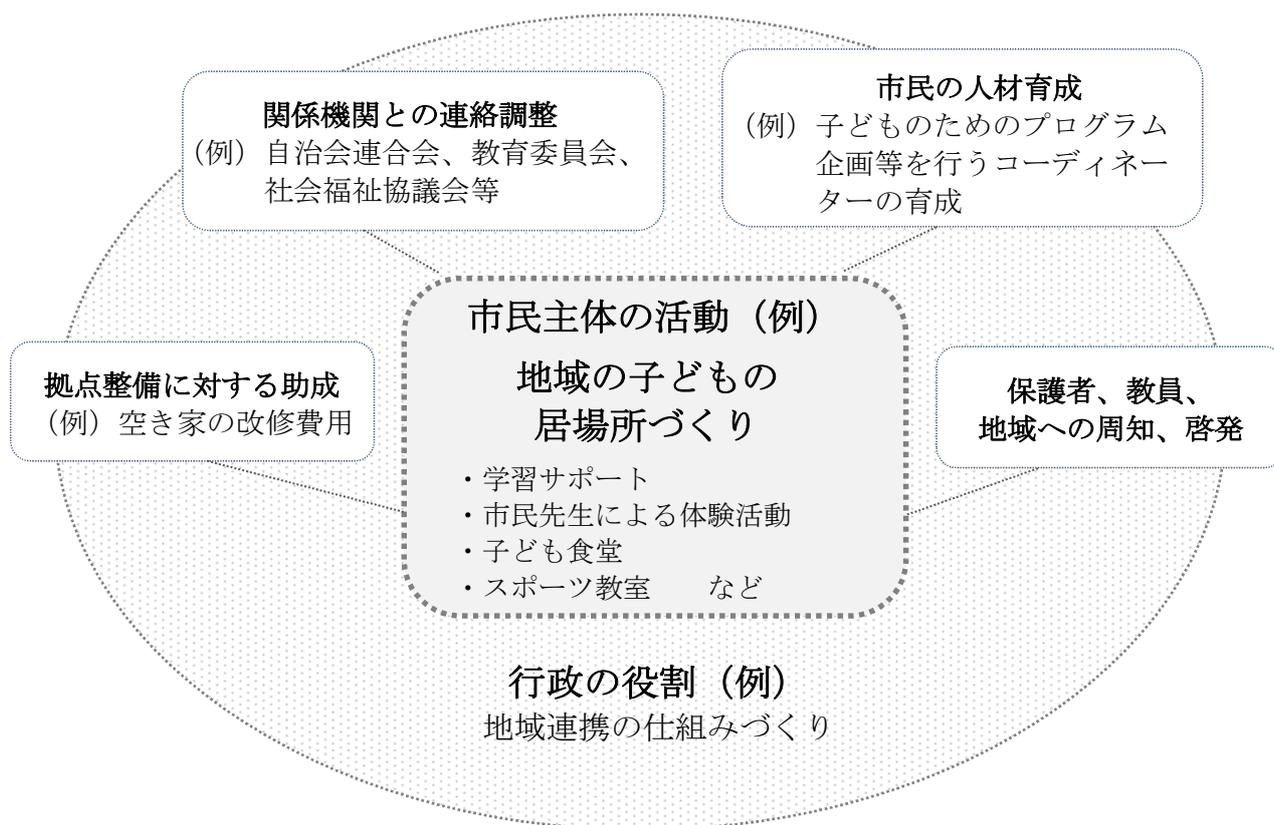


図6 市民主体の活動とそれを支える行政の役割

## 第3章 総括

### 1 事業の成果

市が4年間にわたって幸せのモノサシづくりに取り組んできた成果は2つあります。ひとつ目が、事業の過程において、参加者同士のつながりができ、市民主体の取組が始まったことです。ふたつ目が、市民目線による幸せのモノサシができたことです。

ひとつ目について、幸せ実感広め隊はモノサシづくりの一環として、幸せにつながる活動や取組を行う「長久手人」の取材活動を行ってきました。顔を合わせた取材を通して、活動を広め、人と人をつなげていきたいという想いから生まれたものです。実践に移すまでに時間がかかりましたが、いざやってみると、メンバー自身が楽しみ、幸せのモノサシを考える上で、たくさんのヒントが得られました。取材には、市事務局は同行することなくメンバーが2、3人でグループで出かけ、役割分担しながら取材を進め、共通のフォーマットで取材記録をつくりました。記録は市のホームページで公開しています。それが蓄積してきたら、図鑑をつくろうという話も出ています。

当初に目指したとおり、本事業の過程そのものが「人づくり」「仕組みづくり」であったことが実感できます。今はまだ、市に事務局があり、協働で進めているこの活動が、たくさんの市民の手により息が長い活動として成長、発展していくよう引き続き仕組みづくりを進めていきます。

ふたつ目について、幸せのモノサシは、幸せ実感調査結果や、幸せなまちづくりにつながる活動の実践から得られた、ゆるぎない幸せ実感の要素が多く盛り込まれたものになりました。行政だけでは、生み出せなかったモノサシです。

ただし、ながくて幸せ実感広め隊が考えたモノサシは、完全なものではありません。今後、次期総合計画策定に向けた取組において、より多くの市民と議論を重ねながら、市民の実感として受け入れられるものにしていきたいと考えています。

## 2 関わったメンバーの所感

### (1) 広め隊メンバー 川嶋知子さんの所感

幸せ実感広め隊の活動で学んだこと、それは市民として長久手市の状況を把握し、今現在は豊かな状況に見える長久手市も 50 年後は、想像もつかない時代になることを知りました。そこで、今から市民としてできることの一つとしてながくて幸せ実感調査アンケート結果に基づき、幸せ実感を高めるには何が重要かをメンバーで話し合い、周りの人を幸せに導く活動をされている方々取材することとなりました。普段、他人とはあまり真剣に話したことがない「幸せ」について、メンバーとなら難なく話せし、聞くこともできました。

取材活動で感じたこと学んだこと、それはメンバー一人ひとり感じ方が違うと思いますが、取材したどの方も、とにかく活動が好きで楽しい、楽しいことをやっているから同じ目的を持つ仲間も増え、たくさんのつながりを持っているのだと感じました。

市民まつりで、市民の方に幸せと感ずるためには一番何が重要かと質問したところ、子どもから大人まで、特に 70 歳以上の高齢者は、回答者の 7 割近くの多くの方が健康であることが一番大切と答えていました。健康であるからこそ、好きな活動ができるということに繋がるような気がしました。

このような活動と並行して、市民目線で作る幸せのモノサシづくりも進め、難航していましたが、最終的に子どもの笑顔やつながりが幸せの鍵を握っているということを実感した市民目線の優しい指標ができあがりました。

今年度（平成 28 年度）第 2 回目となるアンケート調査を行うにあたって、回収率を上げるため、アンケート案内も広め隊で相談しながら、より親しみがもてるような紙面を作りました。その効果もあり、回収率が約 14% も上がった事はうれしい成果となりました。

長久手未来まちづくりビジョンにある長久手市の 2050 年の目標に向けて、長久手人の発掘も続けていきます。地域で活動する長久手人とは、言わば、まわりの人を惹きつける存在であり、その人と繋がりたいくなるような人のことと考えます。

長久手人取材にあたって、自分たちの活動の内容を理解していただくため、「広め隊紹介シート」作成しました。その中で、未来まちづくりビジョンを「実のなる大きな木」に例えました。その木は、自然の営みの仕組みとして「長久手人」という完熟した実を作り、それらは広め隊により集められ、長久手人情報の実として、知らない人々へ味わってもらいます。そして、次の世代の長久手人の実を再生し、新しい長久手人を育てていきます。

未来まちづくりビジョンの実現に向けて、まちとひとが循環して、すべて

の市民が長久手人として網目のようにつながるような仕組みを作りたいという想いで、今後も取材を積み重ねていきたいと考えています。

取材記録を市民の皆様に活用していただき、市民同士が繋がり、しあわせ感が高いまちになればどんなに素敵なことでしょう。

## (2) 広め隊メンバー 中川純子さんの所感

幸せ実感広め隊に参加して、普段はお会いすることのない方々に出会い、多くのことを学ばせていただいたことに感謝しております。

日本は、人口減少社会、高齢化が急ピッチで進んでおり、「若い世代が多いまち」と言われている長久手市も例外ではないということ、今までの価値観さえも揺らいでいるということ、まず、最初に学びました。

長久手市が目指す「幸福度の高いまち＝日本一の福祉のまち」の実現に向けて、市民と若手の市職員が幸せとは何かを知るために、アンケートを実施し、結果を分析し、出来たのが幸せを測る尺度となる「幸せのモノサシ」です。

幸せ実感広め隊は、幸せにつながる活動をしている方からお話を伺い、幸せとは何かを手探りながら、個々で掴み取っていきました。活動している方々は、皆、人の為というよりも、自分がやりたいから、自分がやりたいと思うことを共有、共感してくれる仲間と活動し、そこでの発見や感動を分かち合うそのつながりを「幸せ」と感じていること知りました。

長久手のみどりを大切にしたい方は、荒れた土地を整備し、汗だくになりながらも、小さな自然を見つけ、その感動を仲間と共有しています。

長久手の伝統文化を守ろうと、厳しさと誇りを自らを持って示し、担い手を育てる「長久手市棒の手保存会」、現役を退いた人が集まりやすいようにと「老人憩いの家」の開放の手伝いをしている人、親の介護をしながら、つながりを大切にしたいと友人たちを自宅に招いて交流を図っている人、子どもたちに声をかけながら児童の登下校の見守りをしている人。

長久手には、いろいろな形で自ら「幸せ」をつくる活動に携わっている人達があります。それは、性別や年齢にかかわらず、想いを共有し、共感し、時には衝突し、でも、そんなわずらわしさを吹き飛ばし、楽しんでいるようです。そして、その中にたくさんの笑顔がありました。自分に向けられるふっとした笑顔が幸せをもたらしてくれる、そう学んだ時、「幸せ実感広め隊」の活動こそが、私自身の幸せにつながっていることに気がきました。

幸せの感じ方は個々に違うかも知れない。しかし、「幸せになりたい」と願う気持ちは誰でも同じです。私は、広め隊活動を通してできたつながりを大切にしていきたいと思えます。

私たちは、「地域で子どもの笑顔を育てるまち」を目標とし、今生きた者と

して、次世代にこの「幸せ」をつなげていきたいです。次の世代が「幸せ」だと思える環境を作り、続く者が続いて行きたいと思う道を見せてあげたいです。私が「幸せ実感広め隊」の活動を通して学んだこと、取材に応じてくださった方の幸せのあり方を多くの方々に伝え、発信できるようにこれからも取材を続けたいと思っています。

### (3) アドバイザーの所感

ながくて幸せのモノサシづくりという市民と市役所による協働活動にアドバイザーとして関わりを持つことができたことは、一介の研究者として、かけがいのない経験をさせていただいたという実感があります。これまでに、国内外で、地域の豊かさや幸せに関する実践的研究活動に取り組んできましたが、ながくて幸せのモノサシづくりは、格別のものとなりました。

まず、幸せ実感調査隊の活動は、何から何まで、行政がお膳立てをして、そこに市民が参加する、という類のものではなかったということです。行政は、調査隊の立ち上げ、会議設定、会議資料の準備などを担いましたが、調査隊会議の場では、調査隊メンバー同士の熱い意見交換がなされ、少しずつ前に前にと進んでいきました。幸せ実感調査隊が中心になって幸せ実感調査の設計、調査票の作成、収集データの分析、そして、報告書の取りまとめを行いました。

これらの活動の中心は、調査隊メンバーでしたが、メンバーだけの視点で物事を捉えているわけではありませんでした。たとえば、ながくての幸せの要素を考えるにあたっては、実際に市民の幸せの声を集めようという案が出て、ながくて市民祭りの会場に繰り出していきました。幸せ実感調査の調査票の設計の際、これらの市民の声も少なからず参考になっていたはずです。

次に、まちづくりにおいては、地元住民の持っている知識や経験を活かさない手はないという確信を持たたということです。地方自治体が調査を実施する場合には、研究者やコンサルタントに調査設計や調査データ分析や報告書作成を委託することが通常です。技術的専門性に裏打ちされた調査課題であれば、適切な専門家に依頼することは理にかなっています。水質問題の調査であれば、水の専門家に任せることになるわけです。しかし、まちのくらしの評価をする場合には、果たして、誰が専門家であるべきでしょうか。研究者やコンサルタントなのでしょうか。長久手市と協働活動できたことで、今では、この疑問への明快な答えを見つけることができたと感じています。幸せ実感調査の調査方法を調査隊メンバーが作り上げていく過程に参加し、メンバーが出すアイデアや意見の的確さに驚きを覚えることがよくありました。メンバー同士の意見を出し合いながら、「長久手におけるよい生活やよいまちの状態や条件は何か」を具体化する作業に多くの時間を注ぎました。なんと質の高い会議だろう、と、しきりに感心していました。その結果、私が得た結論は、長久手の幸せ実感を探っていくためには、専門家が必要であるけれど、適任者は、研究者やコンサルタントではなく、紛れもない長久手市の市民自身が長久手のまちで暮らす「生活当事者＝専門家」なのだということです。

また、幸せ実感調査隊の取り組みから、行政も実に多くを学ぶことができたはずで、行政の立てる活動計画にただ参加してもらうのではなく、市民が自

発的に行動計画を出し合って、協働活動を進めていくことこそ、行政にとって大きな力になるという実感です。今後は、この協働活動を長久手市民主導の活動として育てていくために知恵を絞っていくことになるでしょう。

このように見えるのは、アドバイザーとして関わってきたから、どうしてもひいき目で見えてしまっているのではないのか？と思われるかもしれませんが、まったくそうではありません。私は、協働型アクション・リサーチの展開に力を入れていて、国内外の研究者とのネットワークを通じて、情報交換することがあります。これまでに、何度か、長久手市の取り組みを紹介したことがあります。すると、決まってもらうコメントは「行政が市民協働を標榜し、実際に行う？そんなことが可能なのか！」という声なのです。長久手の取り組みには、市民参画と協働の要素がたっぷりと盛り込まれているからだと思います。

幸せ実感広め隊は、長久手のまちに住む人や組織の活動の中から、幸せ実感の高い住みよいまち長久手の実現に導く種や芽を集めています。「長久手人」を発掘し、将来の長久手には、長久手人が溢れかえることを目指そうという心意気を感じさせる活動です。この広め隊活動の参加メンバーのみなさんの熱意から、長久手市民の持つ地域への愛着を感じることができました。地域を大切にしたいと心の底から思う人こそ、まちをよりよくする手助けをしてくれるカギであるということも再確認させていただきました。

市民協働のネックになりやすいのは、役所の単年度予算の制約の問題があります。しかし、幸せのモノサシづくりの活動では、単年度で無理やり完成にもっていくことはせずに、主体性を持つ市民協働の醸成に必要な時間を確保できたことが、幸せ調査隊や広め隊活動を継続しえた要因と思っています。

幸せ実感調査隊と広め隊の活動によって、長久手市を市民主導のまちに進化させていくための「まちの体幹」を鍛えあげてきたと思います。ぜひ、これから、2050年に向けて、長久手市がどこまで幸せ感の高い、住みよいまちに近づけるのか、心からのエールを送りたいと思います。

#### (4) 担当職員の所感

「新聞で、「幸福」とか「幸せ」という文字を見ると、なんだか気になるようになっちゃって・・・。」と、いくつかの新聞記事の切り抜きを見せてくださった方、「私は、この活動に参加して、とっても幸せ」と、月に1回の広め隊ミーティングを楽しみに、休まず来てくださった方など、頼もしいメンバーの活動の積み上げにより、このたび「ながくて幸せのモノサシ」を完成させることができました。

この一連の活動に参加したメンバーは、市民ひとり一人、それぞれ違った幸せ感があることを前提にしながらも、自身の幸せや暮らしに向き合い、視点をまちに広げ、幸せなまちを具体的にイメージしていきました。

自分自身が幸せになることは、「まちの人」や「まち自体」が幸せになること、つまり、ひとつの環（わ）のように、『「まち」と「ひと」とがつながることが幸せ感を高める』ことを、実践を通して体感できたことと思います。前述のメンバーの発言を聞いて、そう感じさせられました。

このような市民メンバーに出会えたことは、参加した職員にとって、新たな気持ちや価値観のもとで市民のみなさんとの関わりあいを持ち、仕事を進めていく原動力となりました。

4年間もの長い時間をかけて、市民と市役所が一緒になってじっくりと取り組んできた「ながくて幸せのモノサシ」づくり。その中で生まれたのが、幸せにつながる活動を行う多様な人、団体を紹介する活動です。広め隊メンバーのお知り合いの方の紹介から少しずつ進めていますが、何十人、何百人と記録が集まり、市民に親しまれ、つながりのツールとして活用される人物図鑑になるだろうと大きな期待を寄せています。

市民と市役所が一緒に種を蒔き、育て、まだ芽を出したばかりのこの活動ですが、これからは、市民のみなさんで、手をかけ、花が咲くよう、バトンタッチをしていきたいと思っています。